

美術手帖

200
Vol.
No.8
B

磯崎新×ヤノベケンジ
ゲルハルト・リヒター

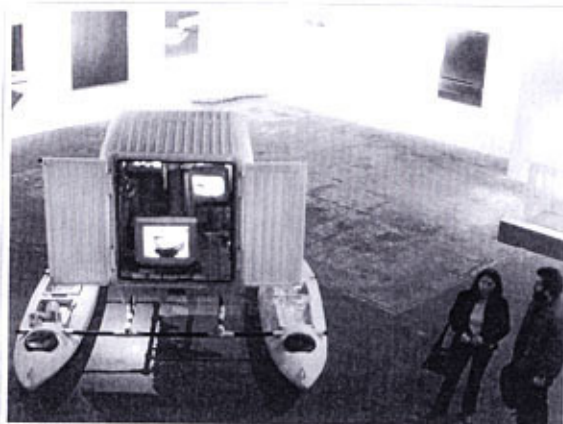
VERY NEW YORK!

特集

ニューヨーク・ニューアート最前線

<http://www.bijuts>

美術を学ぶ **保存版**
2003データ&ガイ



スマック・メロンの内観



こんな作品が道端にあった

「一九九五年にスマック・メロンというアーティストに作品の発表の機会を与えることを目的とした非営利の画廊ができた。利益を追求

はじめて、いまではいったい何百人のアーティストがその中にいるのか分りた。ところが三年あまり前、ぼろくさいコンビニエンスストアが一軒できて大繁盛。キャッシャーの音の止まる暇もないくらい。界隈の工場の労働者に合わせて朝五時に開店、午後の二時に閉めていた食堂はバーを兼業しはじめ、素晴らしい不味かったのが華麗なる匂いを醸し出すようになった。そして二〇〇二年の十

二月には、遂に酒屋までできた。それも三十二歳のオーナーのローランはハンサムなフランス人で、エール・フリップ・ソックリ。マンハッタンのアップ・タウンでもちよつと見かけないようなおしゃべりな店内で毎週水曜日はワイン・ニース・ディンクの夕べを開き、ダンボ地区のアーティストが集まり、和やかで優雅なひとときを提供してくれる。まさか橋の下でこのようなことが起きるとは有司男は思ってもいなかった。飲みたいときにはブルックリン・ハイツまで真つ暗闇の中を恐怖に震えながら行くか、地下鉄に乗ってマンハッタンまで出るしかなかったのだ。

「一九九五年にスマック・メロンというアーティストに作品の発表の機会を与えることを目的とした非営利の画廊ができた。利益を追求

値上がりをするアーティストが青くなった。赤くなった。たりしているうちに、新聞が「いまダンボのアパートに住むのは、ニューヨークで一番おしゃべりな」と無責任に書き、高級アパートが数軒できた。いまだにダンボにはペン・草が生え、年に一度二日半だけのダンボ・フェスティバルが終わった後はだれもいなくなつて、静けさだけが残るというのに、気の早いだけか、ヘビー用品店まで開き、こうなるとアーティストは落ち着いちゃあられない。いったい次は何処へ行ったら良いのだろう。

○しのはらの「二」(アーティスト)



篠原一家と、友人でアーティストの鏡白(写真)



ブルックリン・ブリッジのト

にはじめてダンボ地区を訪れた。リにスケート・ボードに乗ってブルックリン橋を渡ってマンハッタン島を眺めれば、ダウン・タウンのワールド・トレード・センターとウォール街、ミッド・タウンのエンパイア・ステイト・ビルが聳り空にもくつきり見え、時代が半世紀止まったかのようなダンボ地区に比べてあまりにもモダンだった。そこからの眺めが世界でも有数の百万ドルの景観である感さよりも、都落ちする惨めさに打ちひしがれたのは、トレンディに目覚め始めた年頃の空海だけではなかつた。

「おきやあー」と生まれた時から有司男は都会っ子。番町小学校、麻布中学、高校、東京芸大を誇りに思い、世界の最先端を行く芸術家でありたい。たかが羊羹でも宮内庁・公用達に食べたい。それなのに酔っ払いの楽しげな顔に聞こえるバーの一軒すらもなく、鉄筋コンクリートとレンガの空きビルが立ち並んでいて、昼も夜も野犬が出そう。夕方近所の工場が閉まって労働者が帰った後はまるで荒野の一軒家にいる思い。夜中にコーヒーが飲みたくなって見渡す限り暗闇が広が

てきても、似つかわしくはあつてもおかしくはなく、親子揃って、お金持ちしか住めなくなったソーホー地区の華やかさを懐かしんだ。

その頃この界隈をいつも何匹もの犬を連れ、ホームレスがうろついていた。大抵のホームレスはお腹が空いていて、たとえ愛犬があつてもさほど満腹というわけにはいかなかった。その愛犬たちが襲った野良猫の黒毛魔の絶叫はダンボ界隈に響き渡り、篠原一家の「ねずみ(愛猫)」が「メートル半飛び」上がって脅え震えた。



ブルックリン・フロントでのポンプ・エキシビション

注目のダンボ地区は、本当はどうなっているの？

篠原家とダンボ地区、十六年の歴史

いまニューヨークという、ブルックリンのウィリアムズバーグとともにもまききに名前が挙がるダンボ地区。

その話題の地区に1986年から住んでいる篠原有司男、乃リ子夫妻は、この街をもっとよく知る日本人アーティストにちがいない。

乃リ子夫人に、この街の移り変わりといまの様子を紹介してもらった。

篠原乃リ子=文と写真



ブルックリン・フロントでのサ・メタル・パーティー

のが、この七、八年だろうか、なか雰囲気が変わつてきた。写真家やフィルム・メイカー、そして真つ当な二世間のど真ん中ではうさぎがらるミュージシャンがスタジオを持ちはじめ、ひなには稀なる可愛い、一目でモデルか女優あるいはその卵と判る美女たちが地下鉄ヨライのニューヨーク駅に降り立ってダンボ地区をうろつきはじめ、毛を茶色く染めギターやヴァイオリンまで抱えた日本人ミュージシャンの姿も見かけるようになってきた。有司男のロフトの真ん前にあるデパートのように大きなビルは長年真つ暗闇だったのが、週末ごとに引越しのトラックが一台といわす多いときには二台も三台もとまりはじめ、絵や彫刻の材料を運び込み、多くの窓が煌々と輝き